

なら再発見

初夏の奈良を彩る行事のひとつに率川神社（奈良市本子守町）の三枝祭がある。「ゆりまつり」の名で親しまれているこの祭は古く藤原京の時代に厄病を鎮めることを祈る国の祭祀と規定されていた。

三島由紀夫の小説「奔馬」には「これほど美しい神事は見たことがなかった」と語られている。この由緒ある優雅な祭りの主役はササユリだ。その強い香氣と葉は邪気を払うと考えられてきた。

率川神社祭神の神武天皇の后



自生のユリを奉納する神御子美牟須比命神社（宇陀市）

であった媛踏輪五十鈴姫命は三輪の神の子で、三輪山の麓のササユリの咲き誇る狭井川のほとりに住んでいたと古事記にもみえることから、祭りに使われる花は大神神社より運ばれる。もとは三輪周辺に多く自生していたが、近年の環境の変化や乱獲のために激減し、自然の形で繁茂はほとんど期待できない状況となってしまった。

そこで平成4年から神饌田の管理と祭りを行う崇敬会「大神豊年講」が「ささゆり奉仕団」を結成し、人工栽培事業に取り組みることになった。豊年講の講元をつとめる吉岡秀義さん（宇陀市）に話をうかがった。

祭りに約700本のササユリが必要という。古くは大神神社の奥院でもある神御子美牟須

比命神社（宇陀市菟田野大神）の氏子が自生のササユリを奉納していた。

現在でも半分ほどは大神地区の氏子と縁者が貴重な自生の花を採集し、毎年祭の前々日の15日夜に大神神社に納めている。あとの半分は豊年講が20年前から取り組んできた人工栽培で調達されている。

平成6年にビニールハウス裁

「ゆりまつり」を支える人々

培が始められたが、種からの生育は発芽する割合が低く、開花までに7年近い歳月がかかった。同じ条件で育てても翌年開花するとはかぎらない。

そんな厳しい状況の下、豊年講の有志の努力と熱意が実り、今では大神神社の「ささゆり園」や境内でかれんな花を觀賞することができるようになった。しかし最近では、「ユリ根」を狙うイノシシや野ウサギの獣害にも悩まされているそうだ。

奈良に到着後は花車に乗せ、大和郡山大神講の方々も合流し「ささゆり音頭」を舞いながら華やかな行列となり率川神社へと向かう。そして「ささゆり奉獻」の奉告祭が行われ、翌日の三枝祭を待つ。

すべてが清新で人々の神へ崇敬の念に支えられた行事だ。今年もまた電車で揺られてササユリと一緒に旅をしようか。（NPO法人奈良まほろばツムリエの会 辰馬真知子）

「ゆりまつり」の前日の6月16日、大神神社に奉納された花を率川神社に運ぶ「ささゆり奉獻神事」が執り行われる。朝、神前に供えられたササユ

ささゆり奉獻神事



ササユリをカゴに乗せ大神神社を出発する豊年講役員（平成24年6月、桜井市）